

## メガネの話

メガネが重くなりました。・・・メガネが重くなってきたのです。・・・その結果、ボクの両耳が悲鳴を上げ始めました。いや、そもそもその結果、などという表現で語り始めるのは、ボクの苦手な数学や化学での授業中に黒板と対応しているような感じでの場合は一向に相応しくない言葉に思えるので取り消しますが、どの文言が適切に当て嵌まるか冒頭から躓き具合になつてしまいました。(さて、)では妙に構えている感じですし、(それから)でも些か時間的距離を覚えてしまいます。(すると)では余りに直裁で平凡すぎる嫌いがあります。(さて、それから、すると)がダメとなると、他に何か上手い言葉が見つかるでしょうか。あつ、そうだ、そうです。(それで)という助動詞がやっと浮んで来ました。何ということはありません、(それで)が良かったのです。この簡単な助動詞が咄嗟に思い浮かばないのは、やはり七十という高齢の所為でしょうか、それとも、文章作法の未熟さからやってくるのでしょうか。タメ息ものですけれど。

それでは進みます。・・・

朝、寢床から起き掛けに早々、メガネを顔に宛がいますが直に耳がシクシクしてくるのです。特に耳の上の付け根部分がメガネの重みに堪え切れなくなります。疼痛に似た痛みが走ります。酷い時は千切れるのではないかと心配になります。

この症状に気が付き始めたのは最近のことですが気にし始めると妙に気になって、丁度、虫歯の前兆に起こるツンツンした痛みと何等変わりが無い感じがして、そうなるとメガネを掛けているのが苦痛になって外すのですが、これが又、厄介なのです。ボクの視力は0,01というお話にならないくらいの弱視のうえに乱視が合わさった歪んだ水晶体の所有者ですから文字を読み下すのが一通りではありません。顔全体を紙面に舐めるように近付けることを余儀なくされるのです。それに第一、周辺の様子がただ、ぼんやりしてしまつて一体に霧の中を彷徨っているような有り様で焦点が定まらないのです。視力の良い方には恐らく想像できない不便な世界が展開するのです。

通常は眼が悪いと言っても0, 1と0, 2程度が最大ですから如何にボクの眼が悪いかがお察しになれると思います。その半端でない視力を抱えてボクは長い人生を乗り越えてきました。これだけでも健気ではありませんか。ですからボクにとつてメガネは厄介でありながら命の次に大事なものという気持ちですが、昔から漠然とした有難さも頭に刷り込まれているのです。尤も眼の悪いのは親からの遺伝でこれだけはどうしようもないという醒めた諦めもありました。

若い頃は若気のいたりで殴り合いの喧嘩をしたこともありましたが、まあ、それは戯けの極み、そんな時は真つ先にメガネを外するのが喧嘩に勝つコツでありました。夏場、海水浴に行つて泳ぐ時でもメガネを外さなければなりません。十代でバスケットボール、二十代で空手を少し齧ったのですが今、思えばメガネ顔でよくやったとしか思えません。メガネを掛けたバスケットボール選手などは、どの大会に出ても他に見たことはありませんでしたから。

じゃあ、コンタクトレンズに替えればいだろうと他人様は簡単に申すでしょうが、今ではさて置き、半世紀(五十年)前は、未だ開発途上のレンズでありまして馴染みがありませんでした。

十九歳で鮎屋に奉公して二十四歳の時に念願の小さな店を始めましたが、粹な仕事の板前稼業にメガネはないもので、試しに一度はコンタクトレンズに挑戦したことがありましたが眼の中がゴロゴロしてとても性に合うものでないことが分かったのです。それと、自分の眼に向かつてトンボ獲りのような仕草で薄いオハジキに似たレンズを人差し指に乗せて装着することが上手に出来ませんでした。何度も試みても上手く乗せることが出来ないのです。苦心惨憺、ようやく、装着してみると眼の中に異物混入、不快な気分が生まれて到底受け入れ難くて止めてしまいました。所詮、ボクの柄ではないと気付いたのです。聞くところによると最近では大分、レンズが改良され且つ値段も手頃だそうでコンタクトレンズはメガネ市場を席卷しているのだそうですが、ボクにとつては、クワバラ！クワバラ！の感情が先

に立ち容易に近付き難い気持ちが残っています。それと六十年という永い年月に亘ってメガネを掛けていますと顔がおのずからメガネに合わせるように変形してしまつて、たとえば鼻と額の間に深い窪みが出る、メガネ胼胝の谷間が造られてしまいました。両眼はレンズに接近して目ん玉が異様に飛び出る始末、目玉の〇〇ちゃん、と綽名されそうな体たらくだし豊頬だった少年の頃の両頬は醜く垂れ下がり且つマブタの下辺りは半月の溝を作つて、まあ全体に見る影もない無惨な顔です。であります今更、コンタクトレンズでもないというのが正直なところで、メガネをとつて顔を晒すのさえ内心は憚りもの、鏡を覗いて、よくまあ、こんな顔に成り果てたものだ、つくづく己の顔にそっぽを向きたい気持ちに襲われて来るのです。特に婦人の前ではメガネ外しは一番に避けなければいけないボクの作法になりました。まだ古希を迎えても婦人たちへの関心は充分ありますから。脱線したついでですが、一体に老人には偏屈と平助が多くボクもその一人に這入るのかも知れません。

それでは、フレームを取り替えるかメガネ自体を交換する、という話になるのですが、ことは簡単のようでそういう訳にもいかない些細な秘密がボクにはあつたのです。

その前に、今、掛けているメガネのことを話しますと五年ほど前に買いました。恥ずかしい話ですが当時、商っていた店が営業不振で坂道を転げ落ちるほどの状況になりカネの手持ちがまったくありませんでした。十年前から忍び寄つた転落への序章が五年目に極め付きになったのです。首が廻らない厳しい状況に陥り夜逃げ寸前、(店を閉めた現在も借金の返済でその状態は続いています)が、そんな折には悪いことが重なるものでうっかり寝起きにメガネを踏ん付けてしまつたのです。仕方なく新規のメガネを作らなければならなくなりました。それが現在使用しているメガネです。安売りのメガネ店を人伝えに聞き何とか詭えました。確か五千円ほどの廉価のものだったと覚えています。無論、レンズ及びフレーム付きの品物で五千円ですから質の程度は申すまでもありません。アメ色の太い枠、それに分厚いレンズ、彼の有名な国際的彫刻家、故棟方志功氏が掛けていたよう

な牛乳ビンの底を連想させる渦巻きレンズをフレームに嵌め眼に宛がう破目になったのです。横から眺めるとレンズがグルグル渦を巻くのがよく見てとれるのですから想像して余りあるでしょう。若い女性などは思わず、一歩も二歩も引いてしまうような不細工なメガネ顔です。しかし、もう若い頃と違ってそうそう見た目を気にすることも無くなりましたからこんなメガネでもボクは平気で掛けています。落剥すると身に付けるものを始めとして一切合切、最低限にその機能を果たせばよろしいという甚だ軽佻浮薄な真実を発見するものです。

両耳に痛みを感じるようになって試しにメガネの重さを量ってみますと四十五グラムあるではありませんか。軽いフレームだと十グラムから十五グラムが相場だですから如何にボクのフレームが重いかが分かります。耳に負担がやって来るのは当然といえば当然だったのです。それに伴って耳の恰好も心なし屈み込むように内側へまるまって来ました。何だか密林の中で暮らす年老いたメガネ猿でも眺めているような野卑さが滲んで、自分の顔ながら憂鬱なってしまう。人間の品位などという言葉とは終ぞ縁がないほどハッキリした悪人顔の持ち主に変わり果てていました。じゃあ、そうだからと言って五年間もこのメガネに世話になっている現在、責任を転嫁するのも筋が通りません。掛け始めはメガネを重く感じた訳ではなかったのですから要はボクの肉体の衰えから来た重さというふうには解釈すべきだと気が付きました。年老いて筋肉さえも張りを失ってきたのです。

ところで、一昨日ボクの許へ一葉のハガキが来ました。見ると、メガネのサワノからの案内です。ボクは十年来、この店のポストカードを受け取るたびに、ピクツとしてしまうのです。メガネのサワノの案内は、新年、春四月、暑中、秋十月、と季節ごとにボクへ訪れますが何故にボクがビビらなければならぬか、恥を忍んでそのこととお話することにします。

ボクが商売に躓いたのは既にお話ししましたが十年前、その当時はメガネはサワノと決めていましたから丁寧な検眼を施されて新しいメガネの注

文に至ったのです。黒縁のロイドメガネ風のしゃれたものでした。値段は五万円だったと思います。一週間後に出来上がるというので手付け金も置かず帰ることにしました。ところが僅か五、六日の内に急速にお金の遣り繰りに支障が生じてしまったのです。メガネの支払いどころではなくなったのです。下手をすれば自死さえ考えなければならぬところまで追い込まれました。あとはご推察に任せるほかありませんが、そんな理由からサワノでのメガネを無断で反古にしまったのです。カネの遣り繰りはその後も執拗でした。もう、五万円の支払いは無理だろうという気持ちでぶが兆して来て、そうなるかと、ええいっ！と破れかぶれ、頬被りするふてぶてしささえ起こったものです。結局、サワノからは一切の請求もなく季節ごとのポストカードを送ってくるだけになりました。

老舗というところの何と床しい商法でしょうか。それと比べて同じ商人道を歩みながら無言で約束を破棄したボクの品性といったらありやしません。ボクはメガネのサワノの料金別納のハガキを手にする度に、スタイリッシュにとか、そしてエレガンスにとか印刷された活字を眺めながら忸怩たる思いに駆られます。その煌びやかな言葉ほど良心へジワジワと訴えかけるものはありませんから。

お金が出来たら不都合をお詫び方々、無礼になった五万円のせめて半分でも持参して許しを請いたい、店を訪問しようと思いつながら十年の月日が経ちました。一方で今更、おめおめと出向いて行くことなんか出来やしないと言うやくざな答えが木霊のように頭の隅に潜んでいるのも事実です。

しかし、よくよく考えてみますと、十年の間、ボクに、気まずさ、心の疼き、を与え続けるメガネのサワノは、商売の王道を歩みながら実にあっぱれというべきではありませんか。

些細な秘密とはこのことだったので。店との信頼を損なった人間などは、まったく軽蔑に価するわけですから、いつそのことXのマークでも付けてポストカードを郵送してくれたほうがどのくらい気が楽になるか知れません。唾棄すべき男として扱ってくれたほうが・・・サワノさん、

ボクの憂悶を察してくださいな。

今回又、どこかでメガネを求めなければなりません。今度は耳に負担が掛からぬ軽いフレームに決めようと思っっています。遠くはぼんやり気味でも一向に構わないし近場だけでもはっきり見えればそれでO、Kにしようと思腹を括りました。レンズなどは渦巻きでも牛乳ビンの底模様でも何でも構わないのです。予算は三千円以内、果たして適うメガネが見つかるでしょうか。なければ足を棒にしても探す積もりです。

メガネのシヨウモナイ愚痴話を始めたのですが、結果、ボクはメガネのサワノの名を頭の中で連呼してしまいました。

語弊を覚悟の上で敢えて申し上げれば、メガネのサワノは、零落れたボクにとって貧しさに攻撃を加える精神上の敵であります。その敵の名を臆面もなくひそかに呼び続けるなどはどう考えても無知蒙昧、言語道断ではありませんか、呆れ果てて何をか況や、です。

サワノは武士の鑑、生涯適わない相手です。